

山の神古墳の研究：「雄略朝」期前後における地域 社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心 に

辻田，淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院：准教授：日本考古学

<https://hdl.handle.net/2324/1515740>

出版情報：2015-03-23. Department of History, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

第1章 研究の目的と背景

第1節 研究の目的

辻田 淳一郎

1. はじめに：本研究の課題

本研究の課題は、「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心にである。冒頭に掲げた所謂「雄略朝」は、5世紀代の「倭の五王（讃・珍・濟・興・武）」の時代のうち、最後の倭王・武（ワカタケル大王／漢風諡号：雄略天皇）の時代（5世紀後半）を指す。この時代については、特に文献史学の井上光貞氏（1980）や岸俊男氏（1984）らの研究によって、「雄略朝の画期」として注目されてきた。これは、1978年の埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘文の発見により、この時代における「治天下大王」といった天下観、「杖刀人」や「奉事典曹人」などの「人制」と呼ばれる各地の地域集団から中央政権への奉仕・上蕃関係の存在（吉村1993）が明らかになったことも大きく影響している。またその歴史的背景として、中国南北朝・朝鮮半島諸国の競合を中心とした東アジアの国際的緊張関係と、その中で行われた倭の五王による中国南朝・宋への遣使、及び宋からの官爵の授与などが挙げられる。以上から、5世紀後半の「雄略朝」の時代が日本における古代国家形成過程において重要な画期となることが認識されてきた。

考古学の分野では、日本列島の国家形成を考える際、大きく3世紀中葉から6世紀代の古墳時代を国家成立前段階の部族連合と捉える説（近藤1983）や初期国家と捉える説（都出1991）などが存在し、現在も評価が分かれている。また古墳時代でも大きく前・中期（3～5世紀）と後期（6世紀代）を分けて考え、前者を首長連合体制に近く、後者をより国家に近い段階と捉える説（和田2004）や、古墳出土人骨の形質人類学的分析にもとづき、5世紀後半以降に親族関係の父系化が進展し、それを基礎とした経営単位の安定的析出が国家形成の基礎となったとする説（田中1995・2008；岩永2003）などがあり、考古学においても5世紀後半という時期が日本の国家形成過程において大きな転換期であることが指摘されてきた。なお倭国の支配層における親族関係の父系化については、倭の五王の遣使や韓半島諸地域との関係下で、5世紀前半のより古い時期から段階的に進行していた可能性が指摘されており（田中2006）、千葉県稲荷台1号墳出土の「王賜銘鉄剣」などの存在から、従来「雄略朝」期とされてきた諸変革がすでに先行する「允恭朝」の時期に行われつつあったとする理解（e.g. 前之園2013）とも呼応している。以上のような点で、5～6世紀代の東アジア的国際関係とその中での列島社会の政治秩序の実像について、文献史学・考古学双方の成果を統合していくことは列島の古代国家形成研究において大きな課題といえる。本研究は、上述のような問題意識の元、「雄略朝」期とその前後の時期における地域社会と人制に関する実態について、北部九州地域をフィールドとして考古学的な検討を試みるものである。

2. 問題の所在

(1) 「雄略朝」期と「人制」をめぐる諸問題

ここで本研究が対象とする5世紀後半以降に焦点を当てて論点を確認したい。まず5世紀代におけ

る列島社会の対外交渉をめぐっては、「倭の五王」の南朝遣使開始から稲荷山鉄剣における「治天下大王」に至るまでの倭国支配層の自意識の変遷についての検討や、府官制的秩序の導入、將軍号の除正と半島諸国との関係などが問題となってきた（e.g. 坂本1981；鈴木1984・2002・2012；川本1992・2005・2013；熊谷2001；河内春人2010；前之園2013；田中2013；森2010・2013など）。またこの時期の対半島交渉については、百済・新羅・加耶地域との関係が文献史学・考古学双方の立場から議論されてきており、その脈絡の中で韓国全羅南道における前方後円墳の位置づけが論点となっている（e.g. 山尾1989；田中1992・2009；朝鮮学会編2002；白石2004；土生田2006；朴2007；森2011；高田2014）。特に大加耶地域や半島南海岸地域における倭系遺物の出土（高久2004）、また九州をはじめとした各地での新羅系遺物の評価（朴前掲）、栄山江流域における九州系横穴式石室の系譜の問題（柳沢2002・2014）などをはじめとして、列島諸地域と半島諸地域との多元的で複雑な相互交渉の実態が明らかにされつつあるのが現状である。列島における府官制的秩序導入の具体相については、所謂同型鏡群や金銅装武具類などを資料として考古学的検討が進められてきた（e.g. 川西2004；上野編2013；橋本2013）。「雄略朝」期の列島内部の政治秩序については、所謂「首長系譜」の変動という観点から、5世紀末～6世紀前後に大きな画期があることがこれまでも注目されてきた（都出1988；考古学研究会例会委員会編2006）。またこの時期の対外交流という点では、福岡県沖ノ島遺跡や九州各地での半島系遺物の出土なども注目され、近年活発な検討が進められている（「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議2011・2012a・2012b・2013；九州前方後円墳研究会編2012）。

本研究が課題として掲げている「人制」については、直木孝次郎氏（1958）の先駆的研究の後、稲荷山古墳出土鉄剣銘の発見を経て、ワカタケル大王の治世に「治天下大王」の天下観とともに展開したもので、地域集団が中央政権で大王の下に奉仕・上蕃する制度であることが指摘され（吉村1993）、6世紀代に部民制へと解消されていったことが論じられている（吉村2006）。いわば5世紀後半代における中央政権と各地域集団との間の政治的関係や各地での手工業生産の展開や須恵器生産などの技術移転（e.g. 菱田2007；平石2014）といった問題を考える上で指標の1つとなる論点ともいうことができ、この点で考古資料からみた人制の実態や意義は重要な研究課題となっている。列島の人制自体は北魏（川本1992）や新羅（中田2014）などとの共通性が指摘されており、同時代の東アジアの制度の影響下で成立したものとみられる。

他方で、稲荷山鉄剣の発見以後、人制に直接関わるような銘文刀剣などは出土しておらず、銘文刀剣資料のみに依拠した研究には限界がある。この点において、銘文資料が出土していない「雄略朝」期前後の遺跡についても、稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳などの基準資料と比較検討を行うことにより、「人制」に関する新たな評価が可能とろう。以上のような観点から本研究では、「雄略朝」期の問題として、府官制的秩序の導入から「人制」の展開とその具体相、そして中国南朝や半島諸地域との対外交流の諸相といった点を第一の具体的な検討課題として設定したい。

（2）「継体朝」期と磐井の乱、ミヤケの成立をめぐる諸問題

こうした「雄略朝」期を一つの到達点としながら、政治秩序の再編が行われたと想定されるのが6世紀代の「継体朝」から「欽明朝」にかけての時期である。「継体朝」期については、王統譜の問題をはじめ、加耶地域をめぐる対外交渉や百済・武寧王とのつながりなどがこれまでも問題となっており、その中で上述の栄山江流域の前方後円墳の問題についても検討が行われてきた（山尾1989；朝鮮

学会編2002；熊谷2001)。本研究の主たる対象地域である北部九州ではこの時期に「磐井の乱」があり、これまでも考古学・文献史学双方の立場から活発な検討が行われてきた（cf. 小田編1991；亀井1991；田村他1998；山尾1999；柳沢2004・2014）。また列島内の政治秩序についても、継体政権と関係の深い地域の古墳から所謂振り環頭大刀・広帯二山式冠・三葉文楕円形杏葉などが出土することなどから、5世紀までの「威信財」的器物を継承しつつ、新たな種類の器物を加えて刷新することにより、各地の上位層を新たに取り込む戦略が採られたことが指摘されている（福永2005；高松2007）。これと関連して、「雄略朝」期以来、各地の地域集団が「人制」を媒介として中央政権の元で奉仕・上番していたのが、直接王統譜を継承しない継体が大王位に就いたことにより、それに従わない地域集団や新たに政治的関係を取り結んだ集団などの出現により、地域間関係が大きく再編された可能性が指摘されており（中田2014）、考古学的な現象とも一定程度重なってくる可能性がある。

また加耶地域をめぐる百済・新羅両地域の競合などの半島情勢の変動と「磐井の乱」を経て、糟屋屯倉や那津官家をはじめとするミヤケが各地に設置され、6世紀中葉以降ミヤケ制・国造制・部民制が展開することが、列島の古代国家形成において大きな画期となることがこれまでも注目されてきた（cf. 吉田1973・2005；熊谷2001；舘野2004；吉村2006・2010；篠川他2013）。本研究が対象とする北部九州地域は、磐井の乱の舞台でありまた糟屋屯倉や那津官家が実際に設置された遺跡の調査・検討が具体的に行われている地域でもあることから（cf. 柳沢2004・2014；米倉1993；桃崎2010・2012・2014b；岩永2012a・2012b・2014；舘野2004；亀井2004；菅波2012；辻田2012b・2013a）、こうした政治的諸変動の影響が具体的にどのように考古資料にあらわれるかという点が課題となる。この「磐井の乱」とミヤケ設置前後の時期については、東日本においても「武蔵国造の乱」があり、これについても古墳築造動向などから考古学的な検討が進められていることから（cf. 城倉2011）、今後比較検討が期待される場所である。またミヤケ設置以後に国造制や部民制がどのように各地で展開するかについて、文献史学の成果とともに、各地の生産遺跡のあり方や在地の社会秩序との関係を考古学的に検討することも大きな課題といえよう（cf. 菱田2007）。

以上のような研究動向を踏まえ、本研究においては、「雄略朝」期以降、特に「継体朝」期と磐井の乱の前後の時期において、5世紀代の政治秩序がどのように再編されたのかという点、またミヤケ設置前後の時期における地域社会の具体相について、考古学的に検討することを第二の課題としたい。

3. 資料と方法

以上のように、本研究の課題として、大きく2つの課題を設定した。

- ①「雄略朝」期前後における、府官制的秩序の導入から「人制」の展開とその具体相、そして中国南朝や半島諸地域との対外交流の諸相の考古学的検討
- ②「雄略朝」期以降、特に「継体朝」期と磐井の乱の前後の時期における、5世紀代の政治秩序の再編とミヤケ設置前後の時期における地域社会の具体相

「雄略朝」期とその前後における地域間関係の実態を考える上で問題となるのが、各地域における古墳時代遺跡の様相であり、特にこれまでも古墳築造動向の変遷や埴輪をはじめとした各種考古資料の動きに注目した研究が行われてきた（e.g. 都出1988；川西2004；宇垣2006；小栗2006；藏富士2006；新納2006；松木2006；山田2008）。前項でみたような問題意識から、いわば文献史料にもとづ

くイメージと、考古資料にもとづく上位層同士の関係や中央政権と各地域社会との関係についてのイメージとの比較検討が、「雄略朝」期とその前後の歴史的意義を考える上では極めて重要な意義を持つと考える。さらにこの問題を広域的な中心-周辺関係の変質過程として考える際には、中心地=中央政権からの視点のみならず、周辺地域としての各地域社会がどのような役割を果たしたのかという視点が有効と考えられる。この地域社会の側に軸足を置いた地域間関係の研究という点が本研究が採る立場である。

以上のような問題意識の下で上記の2つの課題を検討するにあたり、本研究では北部九州地域、特に遠賀川上流域の嘉穂地域を対象とする。その上で、以下に挙げる具体的な2つの遺跡を軸として調査・研究を行い、それらを嘉穂地域の古墳時代社会の歴史的脈絡に還元してその意義を追求し、かつ他地域と比較することにより、本地域の5・6世紀における東アジア史および列島史の中での位置づけを考える、という方法を採用した。具体的な検討対象遺跡は、福岡県飯塚市に所在する山の神古墳と同桂川町に所在する金比羅山古墳という2基の80m級の前方後円墳である。

従来、この時期の北部九州については、磐井の乱と「筑紫君」への関心から、大型古墳が築造され、また人制関連資料である江田船山古墳も所在する有明海沿岸地域などでの研究が進んでいるが、その一方で、6世紀代に装飾古墳として著名な桂川町寿命王塚古墳が築かれる遠賀川上流域については、5世紀代以前の地域社会の具体相については不明な点も多い。特に「雄略朝」期前後には、嘉穂盆地の飯塚市に約80mの前方後円墳である山の神古墳が築かれているが、これについては正式報告が行われておらず断片的な情報しか知られていないため、後続する王塚古墳との関係も含め、これまで詳細が明らかになっていなかった。山の神古墳は1933（昭和8）年頃に横穴式石室が発見され、出土した多量の遺物は九州大学の鏡山猛氏によって調査された後、現在に至るまで九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室に保管されてきた（第2章第1節参照）。この資料を本科学研究費の共同研究における中核に位置づけて検討を進めるというのが本研究の具体的な計画である。山の神古墳の資料は、5世紀後葉から6世紀中葉までの年代幅を持つ副葬品によって構成されており、上記の①②の課題の内容に深く関わる具体的な研究対象ということが出来る。この資料については、鉄製品を主体とする副葬品の量が膨大であるのみならず、種類も多岐にわたることから、次節に示すような形で、関連資料も含めてそれぞれの分野を専門とする研究者に御参加いただき、共同研究として進めることとした。

またあわせて、上記の山の神古墳が5世紀後葉段階に嘉穂地域に築造され、本地域の集団が「雄略朝」期から「継体朝」期において列島の政治秩序や半島諸地域との対外交渉と深く関わった可能性を考えた場合、山の神古墳が築造された背景や地域的基盤が大きな問題となる。5世紀後葉以前の嘉穂地域においては、前期に舶載三角縁神獣鏡が出土した忠隈古墳や、腕輪形石製品3種が九州で唯一揃って出土した沖出古墳などが知られるが、他にも先に挙げた桂川町王塚古墳を含めた寿命の丘陵上に少なくとも3基の前方後円墳（金比羅山古墳・大平古墳・宮ノ上古墳）が存在することが早くから知られている。これらについては、一部測量調査が行われたのみで詳細が明らかになっていない。この3基のうち、金比羅山古墳は山の神古墳とほぼ同規模の80m級の前方後円墳であり（第3章参照）、86mの王塚古墳に次ぐ規模であることから、その年代的な位置づけも含め、嘉穂地域のみならず遠賀川流域や北部九州地域、ひいては列島全体の中での位置づけが非常に問題となる古墳である。「雄略朝」期前後の山の神古墳の出現の背景および遠賀川上流域における地域社会の実態を考える上でも重要な遺跡であることから、この金比羅山古墳をもう1つの具体的な検討対象として設定する。

以上の2基の前方後円墳は、いずれも嘉穂地域および遠賀川流域では王塚古墳に次いで最大級の古墳であり、上述のように地域社会の歴史的脈絡に還元した上で各地の同時代資料と比較することによって、本地域が持つ歴史的な特質を明らかにするとともに、これらの具体的な未報告資料を対象として検討を行うことにより、従来明らかでなかった新たな様相が確認されることが期待される。また第2章以降でみるように、特に山の神古墳は「雄略朝」期から「継体朝」期の政治秩序や対外交流を考える上で、北部九州や列島諸地域に留まらず、半島諸地域まで含めたより広域的な観点においてこの時期の基準資料となる可能性があることから、山の神古墳の各種資料の理解を基礎として、第2章・5章では共同研究参加者に各地の基準資料との対比とその評価とを行っていただいた。また第3章では金比羅山古墳の調査成果とその意義について報告し、第4章では山の神古墳出土遺物に関する自然科学的な分析の成果を収録している。本報告書は以上の共同研究の成果をまとめたものであり、第6章においてここまで述べてきた課題と問題意識に関わる成果を総括し、今後の課題と展望を述べたい。

第2節 共同研究の関係者と調査の経過

1. 共同研究の関係者

本研究を遂行するにあたっての研究体制は次の通りである。

(研究代表者)

辻田 淳一郎 九州大学大学院人文科学研究院・准教授
研究統括・山の神古墳遺物整理作業・金比羅山古墳調査担当

(研究分担者)

宮本 一夫 九州大学大学院人文科学研究院・教授
山の神古墳遺物整理作業担当

(連携研究者)

桃崎 祐輔 福岡大学人文学部・教授
「雄略朝」期前後における馬具類の調査担当
重藤 輝行 佐賀大学文化教育学部・教授
「雄略朝」期前後における鉄製武具類調査・横穴式石室の比較検討担当
橋本 達也 鹿児島大学総合研究博物館・准教授
「雄略朝」期前後における鉄製武具類の調査担当

(上記以外の報告書執筆分担者：掲載順、所属は平成26年度)

谷澤 亜里 九州大学附属図書館教材開発センター（第2章第2節第2項・第4章第2節・第5章第5節）
中井 歩 九州大学大学院比較社会文化学府（第2章第2節第4項）
的野 文香 九州大学事務局（第2章第2節第5項）

松崎 友理 九州歴史資料館（第2章第2節第6項・第5章第10節）
 西 幸子 福岡大学大学院人文科学研究科（第2章第2節第8項・第5章第7節）
 松浦 宇哲 嘉麻市教育委員会（第2章第2節第9項・第5章第9節）
 岸本 圭 九州国立博物館（第2章第2節第10項）
 加藤 和歳 九州歴史資料館（第4章第1節）
 小林 啓 九州歴史資料館（第4章第1節）
 菅 浩伸 九州大学大学院比較社会文化研究院・教授（第4章第2節）
 嶋田 光一 飯塚市教育委員会（第5章第1節）
 岩橋 由季 九州大学大学院比較社会文化学府（第5章第2節）

（山の神古墳出土遺物の整理・実測・製図等作業参加者：所属は参加当時）

森貴教，絹畠歩，金子真夕，原梓（九州大学大学院人文科学府），福永将大（九州大学大学院比較社会文化学府），舟木太郎・梶佐古幸謙・中野瑞香（九州大学文学部），高木龍弘（福岡大学大学院人文科学研究科），星野三香（鹿児島大学総合研究博物館）

2. 共同研究の経過

本共同研究は，平成23年度に大きく山の神古墳出土遺物の整理作業と金比羅山古墳の調査という2つの調査・研究を併行して進める形で開始した。各年度の調査・研究の経過は以下の通りである（金比羅山古墳の調査の詳細については第3章参照）。

（平成23年度）山の神古墳出土遺物の整理・実測開始，共同研究参加者による検討会（2011年8月8日・2012年2月10日）・金比羅山古墳測量調査

（平成24年度）山の神古墳出土遺物の整理・実測，共同研究参加者による検討会（2012年9月7日・2013年3月15日）・金比羅山古墳の発掘調査

（平成25年度）山の神古墳出土遺物の整理・実測，九州歴史資料館における遺物のX線CT調査，共同研究参加者による検討会（2013年8月29日〔九州国立博物館にて福岡県寿命王塚古墳の遺物調査〕・2014年3月17・18日），金比羅山古墳の発掘調査

（平成26年度）山の神古墳出土遺物の整理・実測，九州歴史資料館における遺物のX線CT調査，九州国立博物館における遺物の三次元計測，共同研究参加者による検討会（2014年6月28日），共同研究成果報告会（2014年7月19・20日，於九州大学箱崎文系キャンパス），和歌山県大谷古墳遺物調査（2014年8月31日），大阪府峯ヶ塚古墳出土遺物調査（2014年9月1日），金比羅山古墳の発掘調査・記者発表・現地説明会（2014年9月21日）・本報告書の作成・刊行

最終年度の2014年7月19・20日に九州大学で開催した成果報告会（「山の神古墳と「雄略朝」期をめぐる諸問題」）には，全国から100名を越す方々に御参加いただき，活発な意見交換が行われた。この際，上野祥史氏を代表者とする円照寺墓山1号墳の研究グループの皆様には多くの御教示をいただきました。また寿命王塚古墳・大谷古墳・峯ヶ塚古墳の遺物見学に際しては，下記の諸機関・関係者の皆様に大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます（五十音順・敬称略）。

赤司善彦，尾園晃，河野一隆，河内一浩，岸本圭，長谷川清之，益田雅司，吉澤則男，京都国立博物館，九州国立博物館，桂川町教育委員会，羽曳野市教育委員会，和歌山市立博物館

第3節 研究対象地域の地理的・歴史的環境

本研究全体の課題と問題意識は第1節で述べたとおりであるが，本節では具体的な研究のフィールドである遠賀川上流域の嘉穂盆地の地理的・歴史的環境の概要について，古墳時代遺跡と近年の研究動向に焦点を当てて検討する。なお，本地域の古墳時代研究史と具体的な古墳時代遺跡の変遷，そして近年の調査成果については，第5章第1節の嶋田光一氏の考察において詳細に整理されており，併せて御参照いただければ幸いである。

1. 嘉穂地域の地理的・歴史的環境

本研究がフィールドとする嘉穂地域は，遠賀川と穂波川が合流する地点に当たり，周辺を山地に囲まれた盆地として立地している。図1-1は，嘉穂地域を含めた北部九州の地図で，6世紀代から8世紀代におけるミヤケや古代山城の位置を示したものである。嘉穂地域は，この地図でいうところの「穂波屯倉」と「鎌屯倉」が置かれた地域に該当する。

本地域には，弥生時代の石庖丁製作地としても著名な立岩遺跡をはじめ，多数の弥生・古墳時代遺跡が存在する（第5章第1節嶋田論文の図1を参照）。立岩遺跡では前漢鏡が多数副葬されており，弥生時代に博多湾沿岸地域から瀬戸内海沿岸地域へとつながる内陸の交通上の要衝に位置することが指摘されている（下條1991；嶋田2012）。この嘉穂盆地の西側には山を越えて福岡平野・粕屋平野が広がり，また東は田川地域を経て周防灘沿岸に抜けるという立地は，古墳時代以降も本地域の基層をなしているといえる。また本地域では弥生時代後期における完形漢鏡の出土も多くみられ，糸島地域や福岡平野とも異なる動きを見せる地域として注目される。

古墳時代になると，本地域でも前方後円墳の築造が行われるようになる。図1-2は，嘉穂地域における群集墳や横穴墓群以外の前方後円墳や円墳などの分布を示したものであり（松浦2014aより改変引用），また表1はそれらのうち築造年代がある程度推定可能な古墳について，重藤輝行氏（2007・2011）による古墳の年代観の整理などを参照しながら，一覧として示したものである（辻田2014bの

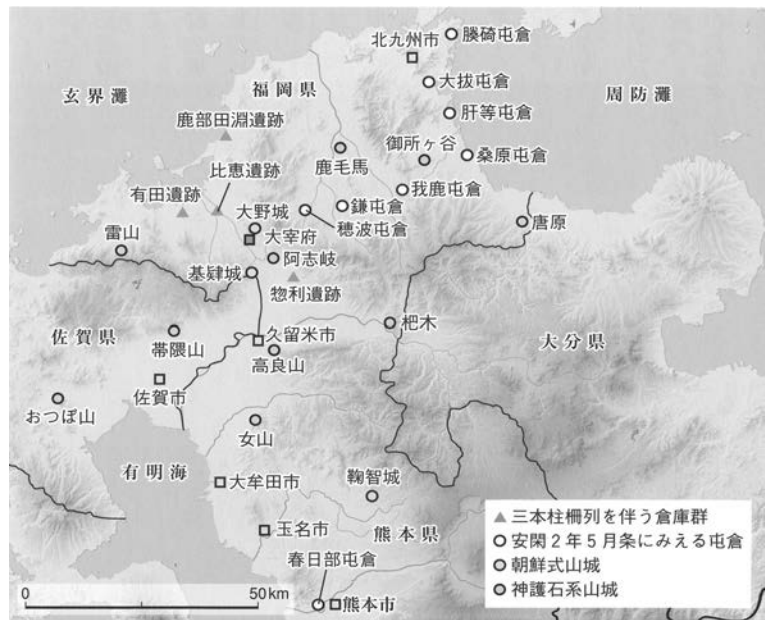
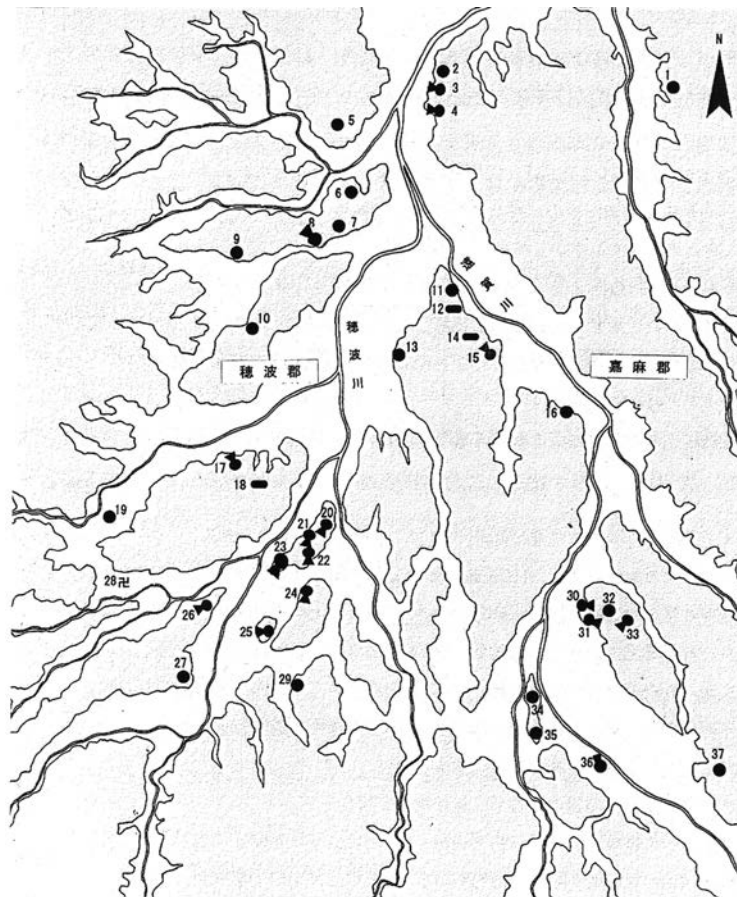


図1-1 北部九州におけるミヤケ・古代山城分布図
(柳沢2014より)

表1を一部改変)。第5章第1節の嶋田論文と第2節の岩橋論文では、この表に記載されていない古墳や群集墳・横穴墓群の年代的な変遷についても整理されており、併せて御参照いただきたい。

本地域の古墳の分布について、筆者は大きく表1に示した5つの地域に区分している。遠賀川はかつて嘉麻川と呼ばれており（岡崎敦・児島隆人1977；第5章第5節図1参照）、この盆地東側を流れる嘉麻川から分岐する



- 1 大門 8号墳
- 2 川島11号墳
- 3 寺山古墳
- 4 宮脇古墳
- 5 川津 1号墳
- 6 檀山古墳
- 7 長浦古墳
- 8 山ノ神古墳
- 9 赤坂 1号墳
- 10 小正西古墳
- 11 辻古墳
- 12 池田横穴墓群
- 13 忠隈古墳
- 14 鶴三緒横穴墓群
- 15 塚山古墳
- 16 かつて塚古墳
- 17 森原 1号墳
- 18 西ノ浦上横穴墓群
- 19 向田古墳群
- 20 金比羅山古墳
- 21 宮ノ上古墳
- 22 太平古墳
- 23 王塚古墳
- 24 天神山古墳
- 25 ホーケントウ古墳
- 26 北古賀 1号墳
- 27 桜ヶ丘古墳
- 28 大分廃寺
- 29 火打塚古墳
- 30 次郎太郎 1号墳
- 31 次郎太郎 2号墳
- 32 次郎太郎 3号墳
- 33 沖出古墳
- 34 下白井日吉古墳
- 35 上白井日吉古墳
- 36 竹生島古墳
- 37 新行坊古墳

図1-2 嘉穂地域の古墳分布図（松浦2012より）

のが西を流れる穂波川である。本稿ではこの分岐点より上流域を嘉麻川として呼称したい。嘉穂盆地の古墳分布は、大きくはこの穂波川流域と嘉麻川流域の2地域に区分でき、前者を3地域に、後者を2地域に区分する。

まず穂波川流域南部（17～29）は現在の桂川町周辺であり、装飾古墳の王塚古墳をはじめ、寿命の丘陵を中心に多数の前方後円墳が築かれている地域である。本研究の調査対象である金比羅山古墳は、この地域の古墳築造の嚆矢となった前方後円墳の可能性があり、築造年代の詳細については第3章で検討する。

次に穂波川流域北部は旧穂波町周辺であり、山の神古墳が所在する西岸地域と忠隈古墳などが分布する東岸地域に区分することができる。西岸地域（6～10）では、前期にも赤坂1号墳などが築造されているが、中期後半に80m級の前方後円墳である山の神古墳が築造され、その後終末期の装飾を有する山王山古墳に至るまで断続的に前方後円墳や大型円墳などが築造されている。東岸地域（11・13）は、嘉麻川との合流地点の南側であるが、前期に忠隈古墳や辻古墳などが築造された後は中・後期の古墳築造が明瞭でなく、嘉麻川に面した丘陵周辺では後期に池田横穴墓群や鶴三緒横穴墓群が造営されている。

次に嘉麻川流域については北部と南部に区分する。北部（2～4）は嘉麻川と穂波川の合流地点付近であり、合併前の旧飯塚市周辺に該当する。ここでは、後期に宮脇古墳・寺山古墳といった前方後円墳が築かれ、6世紀末には壁画装飾古墳である川島11号墳が築造されている。また6世紀後半でも

表1 嘉徳地域の古墳築造動向

| | 集成 編年 | 穂波川流域南部 | 穂波川流域北部 | | 嘉麻川流域北部 | 嘉麻川流域南部 |
|-----|----------|--|-----------------------------------|----------------------|----------------------|---------------------------|
| | | | 西岸 | 東岸 | | |
| 前期 | 1 | *金比羅山(前・81) *宮ノ上(前・37) *大平(前・35) | *赤坂1号(円・21) | 忠隈(円・42) *辻(円・30) | | 西ヶサコ(円・22) |
| | 2 | | | | | |
| | 3 | | | | | |
| | 4 | | | | | |
| 中期 | 5 | *茶白山(円?・一) | | | | |
| | 6 | | | | | |
| | 7 | | | | | |
| | 8 | | | | | |
| 後期 | 9 | 寿命王塚(前・86) | 山の神(前・80) 小正西(円・30) 櫛山(横穴?) | | 宮脇(前・35) 寺山(前・68) | 次郎太郎2号(前・50) 竹生島(前・50) |
| | 10 | 天神山(前・68) | | | | 山王山(円・20>) 【敲打技法装飾】 |
| 終末期 | | | | | | |

※ホーケントウ(前)・北古賀1号墳(前)はいずれも時期不明 ※頭割古墳(前・30?)・横穴式石室)は時期不明 ※井手ヶ浦窯跡

※前：前方後円墳，円：円墳，下線は60m以上の前方後円墳，*：時期が前後する可能性あり

中葉に近い時期から7世紀にかけて、井手ヶ浦窯跡群で須恵器生産が拠点的に行われており、寺山古墳や川島11号墳との関係が注目される場所である。

嘉麻川流域南部(30～37)は現在の嘉麻市周辺地域であり、前期前方後円墳の沖出古墳の他、中期後半以降、次郎太郎古墳群(水ノ江他1997)や竹生島古墳など、40～50m級の前方後円墳が継続して築造される地域である。また松浦宇哲氏(2014c)により紹介された「漆生古墳」は、山の神古墳と近接する時期の築造と目され、横矧板鋌留短甲とf字形鏡板付轡が出土したことが確認されており、次郎太郎3号墳に該当する可能性も含めて検討が行われている。

以上の5つの地域は、それぞれに特色のある古墳築造動向を示している。全体としては、穂波川流域と嘉麻川流域という盆地の東西でそれぞれに古墳の築造がみられ、中・後期にはそれぞれにおいて所謂「首長墓」級の前方後円墳や装飾古墳の築造(穂波川流域北部では敲打装飾技法を用いた山王山古墳、嘉麻川流域北部では壁画装飾を用いた川島11号墳)が行われている。本地域では、このような古墳築造動向に一定の影響を受けた形で、6世紀中葉以降に穂波屯倉と鎌屯倉が設置されたものと想定される。後の律令期以降において行政的に区分された穂波郡の領域は、先に示した穂波川流域の3地域に相当し、嘉麻郡の領域は先の嘉麻川流域の2地域に概ね一致する。その点で本地域は、第1節で示した「雄略朝」期からミヤケの設置を経て律令国家の行政区分に至るまでの、古代国家形成期に

おける地域社会の実態を考える上で極めて重要な地域であることが確認できる。なお図1-1に示されているように、遠賀川中流域では鹿毛馬神籠石が築かれ、また大宰府方面へとつながる古代官道のルートほど近くには大分廃寺(28)が築造されることなどから(梶原2014)、本地域が5・6世紀代以降中央政権によって九州の内陸交通の要衝として認識されていたことが窺われる。

2. 嘉穂地域をめぐる古墳時代研究の動向

先にも述べたように、本地域における古墳時代遺跡に関する調査・研究の学史的な整理については第5章第1節の嶋田光一氏の論考が詳しく、そちらを御参照いただきたい。以下では、先行研究の全てを網羅することはできないが、第1節に述べたような問題意識との関連といった観点から、本地域の古墳時代社会の歴史的な位置づけをめぐるいくつかの研究について紹介し、第2章以降の検討の基礎としたいと考える。

本研究の問題意識に直接関わる先行研究として、まず上述の嶋田氏の一連の研究が挙げられる。嶋田氏は、従来櫛山古墳として報告されてきた遺跡・遺物について再検討を行い、遺跡自体が初期横穴墓の可能性があると、また帯金具をはじめ半島系遺物を多く含んでいることから、6世紀初頭前後において対半島交渉に関わった人物の可能性があると、遺跡が位置するのが後の穂波郡堅磐郷にあたり、「穂波吉士」の故地と推定されるとともに、『日本書紀』にみられる「堅磐固安銭」を具体的な被葬者候補として想定している(嶋田1991)。また嘉穂地域周辺での篋書き須恵器について検討し、「日」銘の須恵器が多いことから、「日下部」の集団が本地域に多く居住していた可能性を指摘している(嶋田1999)。また福岡県飯塚市の目尾石棺しやかのおと呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩製石棺について、同種の石棺が和歌山県大谷古墳などからも出土していることに注目し、遠賀川上流域である嘉穂地域が、筑後平野から米ノ山を越えて遠賀川流域に至り、遠賀川を下って洞海湾から瀬戸内海へと抜ける内陸の交通ルートの要衝として位置づけられたことを想定し、この点から本地域での大型古墳築造の意義を論じている(嶋田2014)。弥生時代以来の福岡平野からの東西ルート(下條1991;嶋田2012)に加え、新たに筑後平野と遠賀川流域・洞海湾・周防灘沿岸から瀬戸内海をつなぐ内陸ルートが利用されたことは、後のミヤケや官道の設置につながっていったことを考える上でも重要である。また氏は嘉穂地域の渡来系の「吉士」集団と和歌山県紀ノ川流域の紀氏集団とのつながりについても、有明海沿岸地域の勢力との間での中継地点といった視点を提示している(嶋田2014)。「筑豊」地域における渡来系の文化という点では、田川盆地の猫迫1号分で5世紀前半の馬形埴輪の出土が知られ、早い段階での「牧」と馬の飼育の可能性が指摘されており(亀田2004)、近年渡来系集団の動きに関心が集まっている(後述、嘉麻市教育委員会編2014)。

また交通ルートの観点では、橋本達也氏が遠賀川流域と半島南部地域における南海産貝製品の出土に注目し、南九州と遠賀川流域、そして遠賀川流域と半島との間での交流ルートの存在について注意を喚起している(橋本2010)。この視点は櫛山古墳(横穴墓)における南海産貝製品や帯金具、小正西古墳における半島系の鉄銚などからも注目され、遠賀川上流域が対半島交渉において重要な役割を担った可能性が想定されている(e.g. 高田2014;中村2014;朴・李2015)。遠賀川流域も含めた玄界灘沿岸地域と有明海沿岸地域では、半島諸地域や中央政権との関係や交流ルートが異なっていた可能性が指摘されており(白石2004・2011;高田2014;朴・李2015)、前者がより新羅地域などとの関係がよく、後者がより中央政権や百済との結び付きがよいため可能性も論じられている。この点で、嘉

穂地域の地域集団と新羅や大加耶などとの関係が具体的にどのようなものであったかが具体的な課題として設定される。また王塚古墳の横穴式石室のプランが栄山江流域の新徳古墳の築造にあたって採用されている可能性も指摘されている（柳沢2002・2004・2014）。

山の神古墳と王塚古墳は時期的に相前後する時期の築造であると想定されるが、両者の関係については不明な点が多い。松浦宇哲氏は、両古墳出土の馬具と他の副葬品の内容について検討し、山の神古墳において半島系の遺物の出土が多いのに対し、王塚古墳ではそれとは異なる遺物の組成となることを指摘し、両古墳の時期の間で、対外交流を含む地域間関係のあり方が異なっている可能性を論じている（松浦2005）。今回山の神古墳の副葬品組成全体が検討されることにより、松浦氏が指摘した地域間関係の変遷の実態がより明確になることが期待される。

本地域および北部九州では、近年ミヤケをめぐる研究が活況を呈している。特に2012年には日本考古学協会福岡大会において、「屯倉制・国造制の成立—磐井の乱と6世紀代の諸変革—」と題した分科会が設けられ（岩永2012a・2012b；館野2012；亀井2012；菅波2012；辻田2012b）、また後述するように同年に嘉麻市教育委員会により『ミヤケと渡来人』と題したシンポジウムが開催された。九州におけるミヤケ研究の現状については柳沢一男氏（2004・2014）桃崎祐輔氏（2010・2012・2014b）と岩永省三氏（2012a・2014）の研究が詳細であり、そちらを御参照いただきたい。本研究との直接関係する研究についてここで触れておきたいが、まず柳沢氏の研究は、6世紀前半代の同時代の築造にかかると目される王塚古墳と岩戸山古墳のそれぞれについて検討したものであり、王塚古墳が6世紀前葉の時期に有明海沿岸地域や近畿・紀伊半島地域などの広域にわたる交流の結果出現したことを論じている。王塚古墳の石柵の系譜については諸説あるが（e.g. 吉村2000・2005；藏富士2002）、いずれにしても王塚古墳の築造が広域的な政治的関係の所産であるという点では評価は一致しているといえよう。この点において、それに先行する山の神古墳の築造がどのような背景によっておこなわれたものかが改めて問題となるところである。桃崎氏の論考（2010・2012・2014b）は、磐井の乱とその後をめぐる文献史学の諸成果（e.g. 小田編1991；亀井1991など）をふまえつつ、九州各地におけるミヤケとそれに関連する可能性が高い各地の古墳時代遺跡を網羅的に検討したものであり、この中で穂波屯倉と鎌屯倉についても具体的な検討が行われている。氏は穂波屯倉の関連遺跡として山の神古墳と王塚古墳、天神山古墳などを挙げ、また先に挙げた嶋田氏による櫛山古墳（横穴墓）と堅磐郷・穂波吉士・堅磐固安銭との関連性を認め、その重要性を論じている。鎌屯倉については、先にみた次郎太郎古墳群や宮脇古墳・寺山古墳・川島11号墳、井手ヶ浦窯跡などに注目している。氏も強調するように、井手ヶ浦窯跡では韓国全羅南道でよくみられる墳周土器と類似した形態の須恵質埴輪壺が出土しており、生産の面においても半島との関連が密接であることが窺われる。また先にみたように、本地域では6世紀末から7世紀末にかけて、穂波川流域北部と嘉麻川流域北部のそれぞれにおいて、別の技術を用いた装飾古墳が築かれており、このうち前者に属する穂波川流域北部の山王山古墳では敲打技法による円文が施されているが、この系譜が筑後川流域を中心として北部九州の広い範囲で認められることが八木健一郎氏や小田富士雄氏らによって指摘されている（八木2011；小田2014）。川島11号墳との技法の違いがその背後にある地域間関係の違いなどを反映しているのかどうか、また在地の地域集団の基盤の違いなどに関わるのかといった点が課題といえよう。

2012年には、嘉麻市教育委員会主催により、田中史生氏・桃崎祐輔氏・朴天秀氏をパネリストとした『ミヤケと渡来人』と題したシンポジウムが開催され（司会：松浦宇哲氏）、2014年にはその記録

集が刊行されている（嘉麻市教育委員会編2014）。全ての議論を紹介することはできないが、このシンポジウムでは、特にミヤケと渡来人による生産活動の関係といった点に焦点が当てられ、穂波屯倉と渡来系の吉士集団、鎌屯倉と須恵器生産・牧などの関係、また屯倉と部民といった様々な問題が議論されている。また王塚古墳の年代が磐井の乱の前であるのか後であるのかといった問題についても議論され、山の神古墳との関係についても論じられている。桃崎氏の議論は、第5章第7節の考察においてさらに展開されているので、併せて御参照いただきたい。

また遠賀川流域は群集墳とともに非常に多くの横穴墓が築造された地域であるが（遠賀川流域文化財学習会2007；松浦2007）、遠賀川流域の各地域における地域性や上位層との関係についても検討が行われている（e.g. 長谷川1991；岩橋2011）。また横穴式石室の変遷や他地域との関係についても整理されており（田村2009）、そうした動向を踏まえて本地域の所謂「首長墓」における横穴式石室の位置づけについても考えていく必要がある。

3. 小結

以上、不十分ながら本研究の課題・問題意識に関わる嘉穂地域の古墳時代研究の動向について検討を行った。近年の研究では、特に新たな遺跡の調査の成果や北部九州全体での研究動向を踏まえ、6世紀代のミヤケ設置時期以降の研究が大きく進展しているのが特徴である。一方で5世紀代以前については資料的な制約もある関係で地域社会の実像については不明な点も多いが、一方で山の神古墳の築造時期前後における半島系遺物や南海産貝製品の出土などから、半島や南九州以南、近畿なども含めた広域交流の結節点あるいは対半島交渉での重要な役割を果たした地域集団の存在といった点が明らかにされているものとみることができる。こうした先行研究を踏まえつつ、以下山の神古墳・金比羅山古墳の調査・研究を通じて本地域の古墳時代社会の実態と列島全体および東アジアの中での同時代史における位置づけについて具体的に検討を行うこととしたい。

【謝辞】

本研究の遂行にあたり、共同研究参加者および執筆者の皆様には、お忙しい中遺物の整理作業を進めていただき、原稿を御執筆いただきましたことに深く感謝申し上げます。また田中良之先生、岩永省三先生、溝口孝司先生をはじめとする九州大学の考古学・人類学関係の諸先生・諸氏には多大な御支援と多くの御教示をいただきました。地元の飯塚市教育委員会・桂川町教育委員会をはじめ、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、嘉麻市教育委員会、田川市教育委員会、福智町教育委員会の関係者の皆様には研究のスタートから報告書刊行に至るまで様々な形で大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 天野末喜 2010 「倭王武の時代—雄略朝をめぐる一視点—」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』。
飯塚市教育委員会 2014 『山王山古墳』、飯塚市文化財調査報告書第45集。
石母田正 1971 『日本の古代国家』、岩波書店。
井上光貞 1980 「雄略朝における王権と東アジア」『東アジア世界における日本古代史講座4』、学生社。
岩永省三 2003 「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」『九州大学総合研究博物館研究報告』1。
岩永省三 2012a 「第2分科会 ミヤケ制・国造制の成立—磐井の乱と6世紀代の諸変革」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』。
岩永省三 2012b 「糟屋屯倉中核施設所在地の可能性」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』。

- 岩永省三 2014 「ミヤケの考古学的研究のための予備的検討」高倉洋彰編『東アジア古文化論考2』, 中国書店.
- 岩橋由季 2011 「九州北部の横穴墓における形態的類似とその背景」『九州考古学』86.
- 上野祥史編 2013 『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』, 六一書房.
- 宇垣匡雅 2006 「吉備地域の帆立貝形古墳」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 梅原末治・小林行雄 1940 『筑前國嘉徳郡王塚装飾古墳』, 京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊.
- 岡崎敬・児嶋隆人 1977 「地理的・歴史的環境」『立岩遺蹟』, 河出書房新社.
- 小川良祐・狩野久・吉村武彦編 2003 『ワカタケル大王とその時代』, 山川出版社.
- 小栗明彦 2006 「「雄略朝」期前後の畿内古墳階層構造」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 小田富士雄編 1991 『古代を考える 磐井の乱』, 吉川弘文館.
- 小田富士雄 2012 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-1.
- 小田富士雄 2014 「山王山古墳における円文系装飾と敲打技法」『山王山古墳』, 飯塚市文化財調査報告書第45集.
- 小野山節 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系 第3巻 日本III 古墳時代』, 平凡社.
- 小野山節 1992 「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑 第1巻 古代上』, 日本中央競馬会・吉川弘文館.
- 遠賀川流域文化財学習会 2007 『遠賀川流域の横穴墓』, 遠賀川流域文化財学習会資料集1.
- 梶原義実 2014 「九州北部地域における古代寺院の展開」『九州考古学』89.
- 嘉徳郡役所 1924 『嘉徳郡誌』, 嘉徳郡役所.
- 嘉麻市教育委員会編 2012 『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 予稿集』, 嘉麻市教育委員会.
- 嘉麻市教育委員会編 2014 『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』, 嘉麻市教育委員会.
- 亀井輝一郎 1991 「磐井の乱の前後」『新版古代の日本1 総説』, 角川書店.
- 亀井輝一郎 2012 「ヤマト王権の九州支配」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』.
- 亀田修一 2004 「豊前西部の渡来人—田川地域を中心に—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』, 小田富士雄先生退職記念事業会.
- 川西宏幸 2004 『同型鏡とワカタケル』, 同成社.
- 川本芳昭 1992 「四, 五世紀の中国と朝鮮・日本」『新版古代の日本2 アジアからみた古代日本』, 角川書店.
- 川本芳昭 2005 『中国の歴史05 中華の崩壊と拡大』, 講談社.
- 川本芳昭 2012 「倭の五王の自称と東アジアの国際情勢」『史淵』149.
- 岸俊男 1984 「画期としての雄略朝」『日本政治社会史研究』(上).
- 九州前方後円墳研究会編 2012 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』, 九州前方後円墳研究会.
- 桂川町編 1967 『桂川町誌』, 桂川町.
- 河内春人 2010 「倭の五王と中国外交」『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』, 吉川弘文館.
- 熊谷公男 2001 『日本の歴史03 大王から天皇へ』, 講談社.
- 藏富士寛 2002 「石棚考」『日本考古学』14.
- 藏富士寛 2006 「「雄略朝」期と九州」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 児嶋隆人・藤田等編 1973 『嘉徳地方史 先史編』, 嘉徳地方史編纂委員会.
- 考古学研究会例会委員会編 2006 『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 小林行雄 1966 「倭の五王の時代」『日本書紀研究』2 (小林1976に採録).
- 小林行雄 1976 『古墳文化論考』, 平凡社.
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』, 岩波書店.
- 坂元義種 1981 『倭の五王』, 教育社.
- 重藤輝行 2007 「福岡県内の古墳時代の首長墓系列」『西健一郎先生退官記念論集』, 西健一郎先生退官記念事業実行委員会.
- 重藤輝行 2011 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』I.
- 篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編著 2013 『国造制の研究—資料編・論考編—』, 八木書店.
- 嶋田光一 1991 「福岡県壱山古墳の再検討」『古文化談叢』, 児嶋隆人先生喜寿記念事業会.
- 嶋田光一 1999 「篋書須恵器の諸問題—『日』の字を篋書した須恵器の再検討を中心として—」『先史学・考古学論

- 究』Ⅲ，竜田考古会。
- 嶋田光一 2012 「不弥国—嘉徳説—」西谷正編『邪馬台国をめぐる国々』，雄山閣。
- 史学・考古学論究』Ⅲ，竜田考古会。
- 嶋田光一 2014 「福岡県目尾の阿蘇石製家形石棺に関する一試考」『先史学・考古学論究』Ⅵ，竜田考古会。
- 下條信行 1991 「北部九州弥生中期の国家間構造と立岩遺跡」『児島隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』，児島隆人先生喜寿記念事業会。
- 城倉正祥 2011 「武蔵国造争乱—研究の現状と課題—」『史観』165。
- 白石太一郎監修 玉名歴史研究会編 2002 『東アジアと江田船山古墳』，雄山閣。
- 白石太一郎 2004 「もう一つの倭・韓ルート」『国立歴史民俗博物館研究報告』110。
- 白石太一郎 2011 「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』Ⅰ。
- 菅波正人 2012 「博多湾岸のミヤケ関連遺跡」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』。
- 鈴木靖民 1984 「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」『講座日本歴史1 原始・古代1』，東京大学出版会。
- 鈴木靖民 2002 「倭国と東アジア」鈴木編『日本の時代史2 倭国と東アジア』，吉川弘文館。
- 鈴木靖民 2012 『倭国史の展開と東アジア』，岩波書店。
- 高久健二 2004 「韓国の倭系遺物—加耶地域出土の倭系遺物を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』110。
- 高田貫太 2014 『古墳時代の日朝関係』，吉川弘文館。
- 高松雅文 2007 「継体大王期の政治的連帯に関する考古学的研究」『ヒストリア』205。
- 館野和己 2004 「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座1』，東京大学出版会。
- 館野和己 2012 「ミヤケ制研究の現在」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』。
- 田村悟 2009 「遠賀川流域の横穴式石室」『地域の考古学—佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集—』，佐田茂先生論文集刊行会。
- 田中俊明 1992 『大加耶連盟の興亡と「任那」』，吉川弘文館。
- 田中俊明 2009 『古代の日本と加耶』，山川出版社。
- 田中史生 2005 『倭国と渡来人』，吉川弘文館。
- 田中史生 2013 「倭の五王と列島支配」『岩波講座日本歴史1 原始・古代1』，岩波書店。
- 田中史生 2014 「ミヤケの経営と渡来人」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』，嘉麻市教育委員会。
- 田中由理 2005 「剣菱形杏葉と6世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』。
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』，柏書房。
- 田中良之 2006 「国家形成下の倭人たち—アイデンティティの変容—」田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』，すいれん舎。
- 田中良之 2008 『骨が語る古代の家族—親族と社会—』，吉川弘文館。
- 田村圓澄・小田富士雄・山尾幸久 1998 『古代最大の内乱 磐井の乱』，大和書房。
- 朝鮮学会編 2002 『前方後円墳と古代日朝関係』，同成社。
- 辻田淳一郎 2006 「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』，すいれん舎。
- 辻田淳一郎 2012a 「九州出土の中国鏡と対外交渉—同型鏡群を中心に—」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』，九州前方後円墳研究会。
- 辻田淳一郎 2012b 「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』。
- 辻田淳一郎 2013a 「古墳時代の集落と那津官家」『新修福岡市史特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』，福岡市。
- 辻田淳一郎 2013b 「古墳時代中期における同型鏡群の系譜と製作技術」『史淵』150。
- 辻田淳一郎 2014a 「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷—九州出土資料を中心として—」『古墳時代の地域間交流2』，九州前方後円墳研究会。
- 辻田淳一郎 2014b 「山の神古墳と「雄略朝」期をめぐる諸問題：趣旨説明—共同研究の目的・背景と山の神古墳の概要—」『山の神古墳と「雄略朝」期をめぐる諸問題 研究発表資料集』，九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室。
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』27，史学篇。
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』343。
- 直木孝次郎 1958 「人制の研究」『日本古代国家の構造』，青木書店。
- 中田興吉 2014 『倭政権の構造【支配構造篇上巻】』，岩田書院。

- 中村友昭 2014 「琉球列島産貝製品からみた地域間交流」『古墳時代の地域間交流 2』, 九州前方後円墳研究会.
- 新納泉 2006 「雄略朝期以後の諸変動と吉備地域」『シンポジウム記録 5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 仁藤敦史 2012 『古代王権と支配構造』, 吉川弘文館.
- 朴天秀 2007 『加耶と倭』, 講談社選書メチエ.
- 朴天秀 2014 「磐井の乱前後の韓日交渉」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』, 嘉麻市教育委員会.
- 朴天秀・李炫姪 2015 「古代韓半島出土琉球列島産貝製品の諸問題」『海洋交流の考古学』, 九集考古学会・嶺南考古学会.
- 橋本達也 2010 「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』, 高知大学人文社会科学系(人文学部).
- 橋本達也 2013 「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』, 六一書房.
- 長谷川清之 1991 「遠賀川流域における横穴墓の研究」『児島隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』, 児島隆人先生喜寿記念事業会.
- 土生田純之 2006 『古墳時代の政治と社会』, 吉川弘文館.
- 樋口隆康 1960 「画文帯神獸鏡と古墳文化」『史林』43-5.
- 樋口隆康 1972 「武寧王陵出土鏡と七子鏡」『史林』55-4.
- 樋口隆康 1979 『古鏡』, 新潮社.
- 樋口隆康 1981 「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール』, 学生社.
- 菱田哲郎 2007 『古代日本 国家形成の考古学』, 京都大学学術出版会.
- 平石充 2014 「人制と出雲」『倭の五王と出雲の豪族』, 島根県立古代出雲歴史博物館.
- 福岡県教育委員会 2011 『井手ヶ浦窯跡群』, 福岡県文化財調査報告書第230集.
- 福永伸哉 2005 「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』, 大阪大学大学院文学研究科.
- 穂波町編 1969 『穂波町誌』, 穂波町.
- 穂波町教育委員会 2001 『忠隈古墳群』, 穂波町文化財調査報告書第13集.
- 前之園亮一 2013 『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』, 岩田書院.
- 松浦宇哲 2005 「福岡県王塚古墳の出現にみる地域間交流の変容」『待兼山考古学論集』, 大阪大学考古学友の会.
- 松浦宇哲 2007 「遠賀川流域の横穴墓研究の現状と課題」『遠賀川流域の横穴墓』, 遠賀川流域文化財学習会資料集 1.
- 松浦宇哲 2012 「「筑豊」のミヤケと渡来文化」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 予稿集』, 嘉麻市教育委員会.
- 松浦宇哲 2014a 「「筑豊」のミヤケと渡来文化」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』, 嘉麻市教育委員会.
- 松浦宇哲 2014b 「古墳出土農工具からみた北部九州の地域性—福岡県内出土事例を中心に—」『古墳時代の地域間交流 2』, 九州前方後円墳研究会.
- 松浦宇哲 2014c 「福岡県嘉麻市漆生(うるしお)の短甲出土古墳」『九前研通信』29.
- 松木武彦 2006 「吉備地域における古墳築造パターンの変化」『シンポジウム記録 5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道を巡る諸問題』, 考古学研究会.
- 水ノ江和同・重藤輝行・尾園晃・岸本圭 1997 「福岡県稲築町次郎太郎古墳群の研究」『九州考古学』72.
- 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2011 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』I.
- 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2012a 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-1.
- 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2012b 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-2.
- 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2013 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』III.
- 桃崎祐輔 2010 「九州の屯倉研究入門」『還暦, 還暦?, 還暦!』武末純一先生還暦記念事業会.
- 桃崎祐輔 2012 「九州の屯倉研究序説」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』.
- 桃崎祐輔 2014a 「山王山古墳出土馬具の検討」『山王山古墳』, 飯塚市文化財調査報告書第45集.
- 桃崎祐輔 2014b 「ミヤケと北部九州の遺跡」『6世紀の九州島 ミヤケと渡来人 記録集』, 嘉麻市教育委員会.
- 森公章 2010 『倭の五王』, 山川出版社.
- 森公章 2011 「東アジア史の中の古墳時代」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』, 同成社.
- 森公章 2013 「五世紀の銘文刀剣と倭王権の支配体制」『東洋大学文学部紀要』第66集史学科篇第38号.
- 八木健一郎 2011 「敲打技法を有する古墳—山王山古墳の検討から—」『古文化談叢』65.
- 柳沢一男 2002 「善男地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『前方後円墳と古代日朝関係』, 同成社.

- 柳沢一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」010, 新泉社.
柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」094, 新泉社.
山尾幸久 1989 『古代の日朝関係』, 塙書房.
山尾幸久 1999 『筑紫君磐井の戦争』, 新日本出版社.
山田俊輔 2008 「雄略朝期の王権と地域」『史観』158.
吉田晶 1973 『日本古代国家成立史論』, 東京大学出版会.
吉田晶 1998 『倭王権の時代』, 新日本新書.
吉田晶 2005 『古代日本の国家形成』, 新日本出版社.
吉村武彦 2003 「ワカタケル王と杖刀人首ヲワケ」小川良祐・狩野久・吉村武彦編 2003 『ワカタケル大王とその時代』, 山川出版社.
吉村武彦 2006 「ヤマト王権と律令制国家の形成」『列島の古代史8 古代史の流れ』, 岩波書店.
吉村武彦 2010 『日本古代史② ヤマト王権』, 岩波新書.
吉村靖徳 2000 「筑前王塚古墳の石室構造に関する一考察—閉塞部の分析を中心として—」『九州旧石器』4.
吉村靖徳 2005 「石棚雑感—九州における系譜と評価をめぐって—」『九州歴史資料館研究論集』30.
米倉秀紀 1993 「那津官家?—博多湾岸における三本柱柵と大型総柱建物群—」『福岡市博物館研究紀要』3.
和田晴吾 2004 「古墳文化論」『日本史講座1』, 東京大学出版会.

【図表出典】

図1-1 柳沢 (2014) より改変引用

図1-2 松浦 (2012) より改変引用

表1 辻田 (2014b) をもとに一部改変